

組織的反抗への道

一九〇七年三月、タイムズの「文芸付録」に、ある評論家が次のように書いている。「新聞や小説で読むかぎりでは、アナキストは国王や大統領を殺害するというのだが、ほとんどの場合、彼らは罪のない一般市民を殺している。彼らは低能な狂信者か、あるいは単なる犯罪人である。彼らよりすぐれた知識人の考え出した理論を自分たちの

犯罪行為の正当化に利用しているにすぎない。「本物のアナキスト」は絶対そんなことではない。事実、彼らは講演と著作活動しかしていないのだ」

当時、この評論家はクロポトキンの有名な論文「パンの獲得」を研究しており、彼のいう「本物」とはクロポトキンのことを指していた。

たしかにクロポトキンはアカデミックな研究に没頭しており、いわゆる直接的な行動に、自ら加わることはなかったが、しかし、その理論でアナキストたちを煽動していたこともたしかな事実である。

彼にとつて話したり、書いたりすることは搾取されている階級を目ざめさせるためであり、「行動による宣伝活動」に対して「言葉による宣伝活動」を行なっていたともいえよう。

しかし、その同じ言葉で、彼はラバコールのような過激な暴力を非難し、人びとに暴力行為の軽減を説いてきたことも事実であった。そしてこの温和な性格のクロポトキンはピアノを弾き、本や手紙を書き、あらゆる分野の知識人を招いて、亡命先のイギリスで平和な生活を送っていたのである。そんな彼をジョージ・バーナード・ショウは、

「彼はまるで聖人のようであったが、ただ欠点は、いつも二週間後には革命がはじまると予言することであった」

と回想している。しかし問題はこの「欠点」である。権力を悪徳と否定した彼の有名なパンフレットは、アナキストの間で次々と

左
パリでの暴動（一八七一年）の後、並べられたコンミュニオン参加者の死体





まわし読みされ、もう今にでもかんたんにアナキスト社会が実現するかのようにならるるを信じこませたからである。

そして、クロボトキンの弟子たちの手で一九〇三年ジュネーブで「パンと自由」という機関紙が発刊されたときも、創刊号に彼の論文が掲載された。

バクーニンの有名な言葉、「破壊欲は創造欲と同一である」をスローガンにするこの機関紙はロシアにひそかに運びこまれ、当時、ピアルストークにはじめて組織されたアナキスト・グループの熱をかきたてたのであった。

事実、クロボトキンの革命のビジョンは、非常に影響力が強かったが、そのことはこの温和な聖人自身、十分承知していたことであつた。

このようなアナキスト指導者はクロボト

キンだけでなく、当時、フランスでは有名な地理学者エリゼ・レクルスや、アナキストの法王と呼ばれていたジャン・グラープ・ジェズイット教団の信者でありながら、後に信仰をすてたセバスチャン・フォルなどの名をあげることができる。

なかでも、裁判を受ける同志、レビルの弁護をかってた雄弁家、セバスチャン・フォルの演説は、言葉による宣伝活動の典型的なものであろう。

「かんたんに近代社会を描いてみよう。まず頂点には、祈つていさえすればよい神父と、国防の秘密を他国に売っている軍人と、不正を美化する作家、そしてみにくさを理想だとうたっている詩人がいる。商人は客をいつわり、業者は製品をごまかし、相場師は金もうけだけを考えている。ところがこれらの人たちの下には、自分の家もない

右
パリ・コンミュンでは資本家を嘲笑の的にしていたマンガで、「盗む権利」を画いた。

建築労働者、一着の服もない仕立職人、ひとときのパンも食べられない飢えた製パン職人、いつも失業と飢餓に苦しむ何百万人もの工業労働者がいるのだ。彼らの家庭はスラム街におしこめられ、その家族を養うためからだを売っている一五歳の少女たち……かわいそうに彼女らは汗くさい老人の腕にだかれ、ブルジョア階級のみだらな欲望の犠牲になつてゐるのだ」

彼は、これらの不平等が日ましに高まる反権力運動の原因であり、やがてこれは世界革命へとつながる。そしていつの日にかアナキストの思想を万人が認める日がきつとくるのだと、その演説をむすんだのであつた。

組織的反抗へのいとぐち

このような理論的指導者の言葉による活動を背後に、アナキズムの組織的反抗がみられるようになるのだが、後に組織的反抗のモデルになったとも考えられる、パリ・コンミュニオンの事件（一八七一年三月）から記述していこう。

この反乱は正確にはアナキスト組織が行なったものではないが、「労働者の解放区」と呼ばれるコンミュニオンの理念はアナキズムと相通じるところがあり、個人的には多くのアナキストが参加していた。

つまり、地方自治という考え方がアナキストの基本原則にかなっていたからである。したがって、コンミュニオン参加者の多くは、ブルードンの説く連邦政府に共鳴しており

ブルードンはマルクスより有能な指導者だとされていた。

このコンミュニオンも五月にはいつて「血の週間」と呼ばれる激戦を最後に、パリはふたたび政府側の手に帰るのであったが、この革命の残した影響は決して小さくなかった。

ひとつには、労働者がみずから、一定の秩序のもとに組織することに成功したという自信である。パリの大司教をはじめ、何人かの聖職者を殺害したこの反乱を、あえて秩序だったというのは、彼らのつくった壁新聞やコンミュニオンの法律をみると、彼らの目的が決して破壊そのものでないことがわかるからである。事実、フランス銀行にはなんの被害もなかったのである。

もうひとつの影響はフランス共和国軍隊が何千というコンミュニオン参加者を、まる

で犬か猫のように、むごたらしく虐殺したため、彼らを復讐へとかりたてたことである。体制がわの、この野蛮な弾圧行動をアナキストたちはだれひとりとして忘れるものはなかった。

それから二〇年以上もたって、エミール・アンリがカフェ・テルミナスへ爆弾を投げ込んだとき、イギリスのアナキスト機関誌は彼を次のように紹介した。

「アンリは、何千人もの労働者、女、子どもが東になって殺されたあのパリ・コンミュニオンに参加した男の子どもである。鎮圧後も、縛られ、さらし者にされた労働者を道行くブルジョアたちが、つばをはきかけ、

上 コンミュニオン参加者は軍隊の手で射殺された。

下 カて対抗したフランス共和国側はメーデーのデモ行進中にも発砲した。



ステッキでなぐりつけ、「みんな殺してしまえ」と叫んでいるのを、彼は子ども心にもじつところえて見ていたのだ」

これがコンミュニョンの遺産であり、労働者の勇氣ある蜂起もさることながら、強く人びとの心に残ったのは、ブルジョア階級の残忍な行為の数々なのであった。そして、この組織的反抗によって理想的アナキスト社会を建設しようという夢はふたたび呼び起されたのである。

一八九二年一月、スペインのヘレスで農民運動が起こった。

「我々はもう待てない。我々が先頭をきつて革命を起こすのだ。アナキー万歳！」

この叫び声とともに四〇〇〇人にもものぼる農業労働者がヘレスの村に棒つきれや草かりガマを持って行進していった。彼らを直接行動にかりたてたのは、ひどい飢餓で

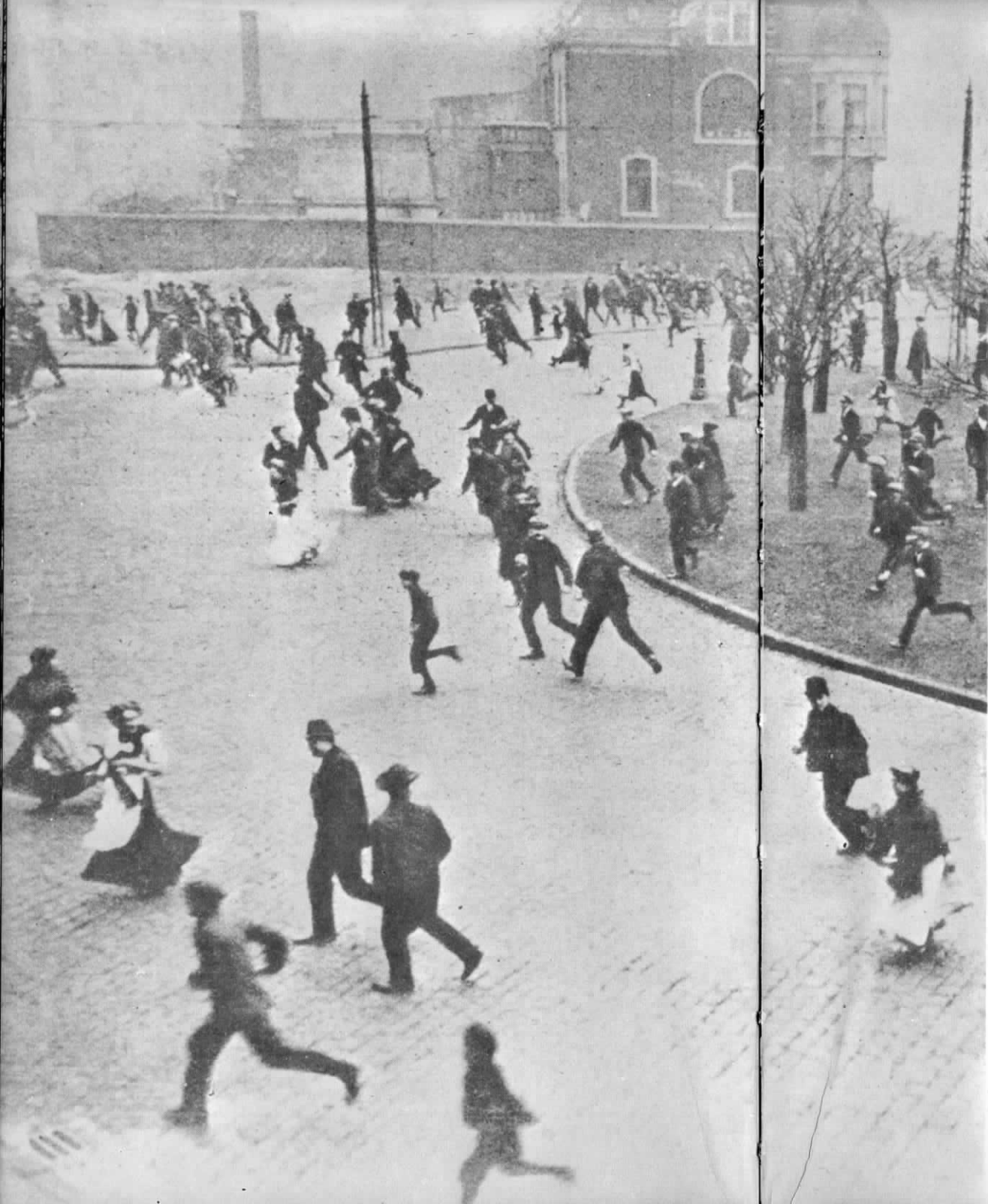
あった。彼らは食料を求めて食料品店の主人を殺害した以外は、ほとんど何もできずすぐ鎮圧され、結果はみじめなものに終わった。四人の指導者は死刑、二〇人が重労働刑を宣告された。

組織化の傾向がみられたアナキズムにもパリ・コンミュニョンからヘレスの反乱と続いた、一連の組織的反抗の失敗で、ふたたび単独テロが効果ある方法として重要視されていくかのように思われた。クロポトキン、マラテスタ、フォールなどの指導者の説く「人民の決起」による革命を若いアナキストたちは時代おくれの手段だと考えるようになり、暗殺の方がよほど機敏で、手つとりばよい方法だと主張するようになった。しかし、そこにアナルコ・サンジカリズムが登場するのである。

アナルコ・サンジカリズム

これは労働組合(サンジカ)の運動に、アナキストの理論を組み込んだ、いわば、革命的組合運動ともいうべきもので、従来の単独テロや、急進的革新とくらべると、ずっと具体的な活力をひめていたといえる。その理論的指導者たちは、運動の頂点を全面ストにより、すべての社会的機能をマヒさせるゼネラル・ストライキを考えていた。その指導者のひとり、フェルナンド・ペルティエは革命のいない手となるべき労働者の無知を痛感していた。労働者階級が

左 二〇世紀の前半、労働者はストライキで戦ったが権力側はこれに力に応じて戦った。写真はドイツのスト会議が警察によってつぶされたときのもの。



無教育の状態で放置されている原因はなにか？ それは政府が意図的に行なっているのである。無知のほうに服従させやすいから、ペルーティエはそう考えていた。そこで彼は労働組合の活動の中に「教育」をとりいれなければならないと主張し、「労働者による、労働者の教育」のために、若い情熱を燃やすのであった。

一八九五年、当時、労働組合運動から独立していた労働交換連盟、通称ブルス連盟の事務総長に選出されたペルーティエは、その小さな団体を労働者教育のひとつのモデルにしたのである。彼は組合運動を三つの重要な要素に要約した。まず第一に、労働者がお互いに助け合うことのできるサージス機関でなければならぬ。労働交換連盟はひとつの国の中にあるもうひとつの国と同じであり、労働者階級の利益を守るた

めの、すべての問題を管理する団体にならなければならないとのべた。

第二に労働組合は教育機関として、労働者のための大学にならなければならないと説いた。そして第三には、アナキズムの理想にそって、いまの社会体制を変革する宣伝機関としての必要性を説いた。その思想のゆえに、個人行動を重んじ、組織活動を疑惑の目で見るアナキストと、「教育」の重要性を理解しない労働組合員との統一を目標としたのである。

彼は「革命とは建設することである」と信じ、フランス大革命（一七八九年）以来一世紀にわたって挫折をくりかえしてきた「革命」の夢を実現できるのは、アナルコ・サンジカリズムしかないのだと考えて、そのすべてをこの運動のためにささげ、三四歳の若さで他界した。しかし、彼の理想は

やがてより力強い活動の中に生き続けたのであった。

国際アナキスト大会

これらの思想家の流れを総括すれば、バクーニンは、アナキスト革命の生みの親であり、独自の経済共同体を提唱したブルードンは、アナルコ・サンジカリズムの始祖であり、創造性に富んだペルーティエはブルードンの直系ともいえるであろう。

ペルーティエの努力によって、フランスでさかんになつた革命的サンジカリズムの動きは、やがて各国に飛び火した。

一九〇八年に、アムステルダムでアナキ

左 アナキスト指導者に導かれる労働者会議。写真は、バルセロナの反乱直前のもの





スト会議が開催されたが、そのときの論争の中には、アナキズムと労働組合との関係があった。ゼネストを武器とする、アナルコ・サンジカリズムが、はたして、バクーニンの性急な、しかも自発的な革命説にとつてかわるものかどうかが問われたのである。創造的大衆は、いかにして自由を主張すべきなのか？ ペルーティエに深く影響されていた二五歳の青年、ピエール・モナツトが、まず最初に発言した。

「盲人でないかぎり、アナキズムとサンジカリズムの共通点を見逃す者はいない。どちらも社会革命によって、資本主義と賃金制度の打倒をめざしているのだ。アナルコ・サンジカリズムは今まで眠っていた労働運動が目ざめた姿なのだ。それはアナキズムの出発点、つまり、労働者階級のあるべき原点なのだ」

さらに彼はストライキとサボタージュの必要性を強調した。ストライキはサンジカリストの手段であり、サボタージュはストライキをしても雇用者側の圧力をはねかえせないときに使う手段であったからである。彼はさらにつけ加え、

「フランスにおける革命の情熱は年々下がってくるように見えたが、サンジカリズムの出現でふたたびよみがえってきた。かつてのアナキストは、ダイナマイトでブルジョアをおびやかしたが、今はサンジカリズムが、彼らを恐怖に陥れている」と結んだ。

エリコ・マラテスタは反論した。

「サンジカリズムは根本的に保守的で、体制内で合法的に目的を追求するにすぎず、そんな運動が革命に転化するはずがない。なぜなら、労働組合というものは、結局は

各々の企業の経済的利益を優先させるから各組間の調整がとれるはずがない」

と、彼は主張した。彼は、アナキストが組合にはいる必要性は認めたが、それはあくまでアナキズムの宣伝のためであり、さらに革命後、生産手段をコントロールする準備のためであるとのべた。さらにサンジカリストの主張するゼネストは、革命の初期の段階では必要だが、大衆の武装決起が革命のカギであり、大衆による革命以外に未来のアナキスト社会を約束するものはないとのべ、また次のようにも語った。

「我々のめざすアナキスト革命はひとつの階級の利益を超越するものである。我々は現在、経済的、政治的、道徳的に支配されつつけている全人類を解放したいのだ。特

左 バルセロナの反乱のとき、修道院から逃げ出す修道女たち。

定階級に独占され、強制されている行動を認めることはできない。サンジャリズムはたしかに、労働者階級を決起させるのに有効な手段ではあるが、それだけがアナキスト革命の唯一の手段ではない」

なかにはもつと強い言葉で、モナットを批判するアナキストもあったが、もはやサンジャリズムを全面的に否定することはできず、会議の大勢はサンジャリストを支持し、年をとったアナキストたちの過去の思いつきに耳を傾けるものはいなかった。

バルセロナの反乱

しかし、この会議の二年後、一九〇七年七月、バクーニンを支持するアナキストにとっては、まさに彼らが夢みていた事件が

バルセロナで起こった。この反乱に参加したアナキスト、アンセルモ・ロレンツォは、次のような手紙を送った。

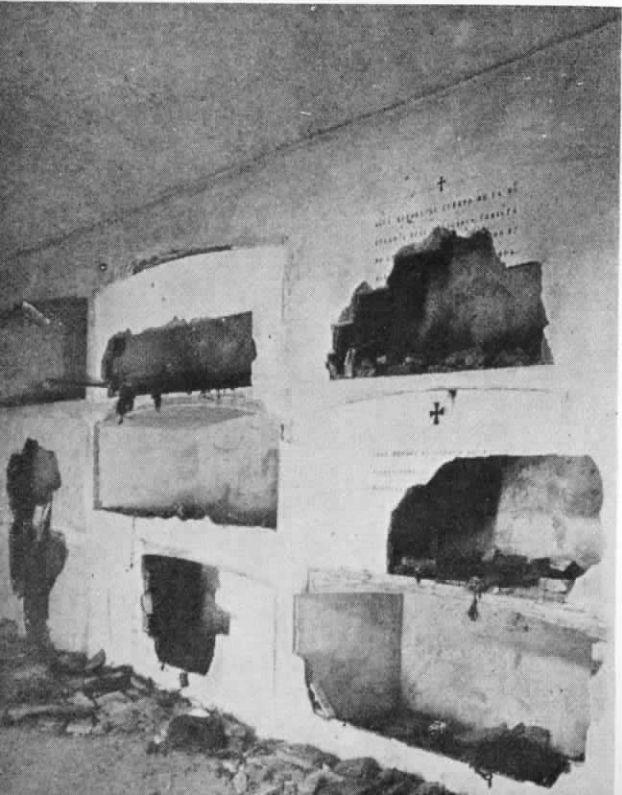
「ここで今、おどろくべきことが起こっている。社会革命がはじまったのだ。だれにも指導されずに起こったのだ。民主党もカタラン民族党も、共和党も社会党も、そして、アナキストさえも彼らを指導していないのだ」

一方、スペイン政府の見解は違っていた。国王アルフォンソ一三世にあてた、アントニオ・マウラ首相の電報は、この事件が、「何か煽動的な運動」によって起こされ、陰に指導者がいると伝えていた。実際は、ロレンツォが書いたとおり、大衆が自発的に引き起こしたものであり、それはまたあらかじめ予想できないことでもなかった。バルセロナ市をふくめた、カタロニア地方

一帯は、歴史的にもマドリッドの中央政府に対して、敵意と疑いを持っており、スペインの産業の中心地として、労働者階級の意識はかなりたかまっていたからである。

港や紡績工場で働くために、田舎から出てきた農民たちは、農村に浸透していたアナキズム思想を持ち込み、低賃金労働者の間に、アナキストが増大していた。マルクス社会主義も同じように勢力を増していた。マルクス主義とアナキズムは、ライバルであったが、危機に際しては、たがいに手を結んで戦っていた。さらに情熱的な共和主義者、アルハンドロ・レルーも強い影響力を持っており、反乱の下地を作っていた。これらの動きが総合的に革命へと結びつい

左 燃えるバルセロナ市。
左下 労働者がこわしたはか。
右 暴動を鎮圧に行った政府軍。



たものであり、計画的に引き起こされたものではなかった。むしろ、直接原因は政府がみずから作り出したものであった。

政府はモロッコとの戦いに苦戦し、戦争継続のため、カタロニア地方から予備兵を召集した。これが反乱の直接原因であった。というのは、予備兵の大半は労働者であり、彼らの脳裡には、キューバ、フィリピン、プエルトリコでくり返された悲惨な戦争の想い出が、強烈に残っていたのである。スペインは、一八九八年のアメリカとの戦争に敗れた結果、これらの植民地を失ったが、そのとき、マラリアと餓死という悲惨な経験をしたのは、ほかならぬ労働者自身であった。さらに、モロッコ戦争の原因が、ジェスイット教団政府の鉄鉱山保護のためだというわさが流れ、人びとは政府の背後に教会の黒い手を感じていた。した

がって、アナキストたちが考えた以上に自発的な反乱だともいえるのである。この反乱をもう少し詳しくわしく記述してみよう。

一九〇九年七月二十六日、月曜日。労働者たちは、アナキストと社会主義者の合同会議で決定されたゼネストを実行した。兵隊を輸送する列車は、レールの上ですわりこんだ女たちの一団によって出発を阻止され、労働者たちは町に出て、予備兵輸送を阻止する抗議運動を展開した。市内では路面電車が倒され、連絡機関はすべて絶たれてしまった。

火曜日には、バルセロナ市は完全に人民のものとなった。しかし、木曜日にはいつて、軍と警察が反撃を開始した。人びとはこれに対抗して、バリケードを築いて応戦した。また宗教関係の建物も襲撃、破壊した。前に「教会の黒い手」と表現したが、

国教であるカトリック教会は財界や政界と強く結びついていて、かなりの力を持っていた。そのため、労働者たちは教会を政治権力と同一視するようになっていたのである。

バルセロナの反乱で起きた、修道院への放火など、一連の冒瀆行為は、カトリック教会の弾圧に対する労働者の怒りの表現であり、同時に宗教的タブーへの挑戦でもあった。労働者たちは、教会への礼服を着て、修道女たちの棺を開け、死体を道ばたに投げすてた。一見、単純な破壊行為のように見えるが、これは教会の力をためし、カトリックの神秘的な超自然能力が、いつわりものであることを証明するためであった。

左 自由主義の最大の指導者であったフェレルはバルセロナ暴動の指導者と見られ処刑された。





しかし、神の無力を証明することに成功した彼らも、現実の権力に対しては、まるで無力であった。週末にはいると、政府は統制力を回復しふたたび反乱の鎮圧にはいった。反乱が鎮圧されると、一五〇人以上の男女が、街頭で虐殺され、裁判もなしに処刑はその後も続けられた。群衆は僧侶たちの生命を尊重したが、権力がわは宗教的タブーに対する挑戦を許すことができなかったのだ。

反乱の主謀者を見つけれない政府は、当時、著名な教育改革者だったフランシスコ・フェレルを逮捕した。フェレルは子どもたちを非宗教的に教育し、自由な思考力をつけさせることを目的とした近代学校をはじめたため、伝統的カトリック教会の非難をかっていた。

彼には、しゃくし定規的なところも少々

あったが、教育に対する情熱はすばらしいものがあつた。またアナキストグループとも関係を持っており、彼の成人学級の教室がこれにあてられていた。印刷所では多くのアナキズム系の出版物が発刊されていた。カトリック教会は、彼の学校を、悪魔と手をむすんでいると非難して、アナキズムの過去集団だと考えていた。

そこで、彼をバルセロナの反乱の首謀者にしたあげたのである。たとえ事実上の首謀者ではないとしても、道徳上の責任者であるとして彼は有罪を宣告され、処刑されてしまった。実際、彼は事件当時、ロンドンに滞在しており、反乱とはなんの関係もなかった。銃殺隊に向かつて、彼は、「よく狙え！ 友よ！ 君たちに責任はない。私は無罪だ！ 近代学校万歳！」と叫んで死んでいった。

左 バルセロナ事件後、政府の残忍な復讐に抗議するパレード（パリで）
 右上 スペインの王子を、国王と同様教会の良き理解者となるよう教育している様子——王子はフェレルの頭で遊んでいる。
 右下 神父が新しい十字架を見ている。よく見るとその十字架は反乱者の処刑に使った道具でできている。

しかし、処刑の数日後から、ヨーロッパ中のいたるところで、この政治的殺人に反対するデモがくりひろげられるようになった。この抗議は、アナキストだけではなく自由主義を主張するあらゆる人びとの間からまきおこってきた。この抗議のあらしにアルフォンソ国王は、総理大臣のアントニオ・マウラを免職させなければならなかった。

しかし、「悲劇の一週間」と呼ばれるこの反乱は、いったい革命とよばれるほどのもの

のであったのだろうか？ 一九〇五年のロシア革命にくらべて、バルセロナの蜂起は、たんに二日か三日間、人びとに劇的なニュースを提供したにすぎなかった。アナキストのいう、創造的大衆は、このせつかくのチャンスにも、結局建設的なことは何ひとつできなかつたのである。

手をつなぐサンジカリスト

しかし、革命家による計画を指導なしに、人民みずからが決起できるという事実は、マラテスタとアムステルダム大会で、彼を支持した人々とに、大きな自信を与えた。またこの人民決起のきっかけは、ゼネストが作り出したものであるという点で、同時にサンジカリストにも、大きな自信となつ

たわけである。

アナルコ・サンジカリストたちは、このゼネストの効果をできるかぎり宣伝した。これに影響されて、その後、アナキスト労働組合が、いくつもあらわれてきた。フェレルの処刑の一年後の一九一〇年一〇月には、これらの自由主義的労働組合が、手を組んで、全国労働連合(CNT)が結成されることになった。

この組織は、アナキストの強調する「自治」を尊重し、全国的ではなく、各地方単位で組織されていた。また組合で働く幹部は無給で、永久職では会費も非常に安く、ストライキ資金といったものも徴集しなかつた。このような方法で、CNTはアナキズムという「自主性」を重んじながら、これもサンジカリズムのいう「組織」に組み入れ、「自由」と「統制」という相異なるテ

ーマを、やわらかい組織機構の中でたくみに妥協させていった。

ある意味で、CNTは成功したといつてもいいであろう。というのは、CNTは、その発展のプロセスはどうであったにせよ、スペインのアナキズムの基本的性格を明日的なものにした。CNTは、その組合員の間に、自由のためには死ぬこともいとわなといった強い意識を育てあげた。これが後のスペインの内戦では、共和国側の指導的役割をはたし、国家主義(ファシズム)に対して勇かに戦う力となった。

一九三六年十一月、CNTの代表人物が

左 フランス軍隊とストライキを行なう労働者の衝突を画いた左派のポスター。

72ページ 下層階級が権力をにぎったときの中流階級の恐怖を画いたもの、—中流階級の悪夢—





殺害されたが、そのときの組合員たちの言動は、スペインのアナルコ・サンジカリズムの同志的結合の強さを物語っている。マドリッドの陸軍省の外に集まった群集に対して、フレデリカ・モントセニは、同志ドルチイを失った悲しみを、次のように人びとに語りかけた。

「何かとても重要なものを失ったのではないでしようか。我々が失くしたものは、まるでからだの一部のようなものです。全スペインが同じような悲しみを感じているでしょう。『象徴』と呼ばれる人は、もはや一部の人間の代表ではなく、ただ同志とただの友人でもなく、国民の代表なのです。今、新しいスペインを建設しようとしている、我々すべてのシンボル、スペインの血の川から建設される新しい社会、新しいシンボル、ドルチイ、あなたは、無限の

自信」と正義、そして、我々の理想なので

す」
そして演説の最後に、彼女は集団による復しゅうを叫んだ。

「兄弟であり、友でもあったドルチイ。あなたとともに戦ったすべての友の心の中に、いつまでも生きつづけるドルチイ。笑い、ともに夢みて、あなたとともに死をもおそれず……ドルチイ。私たちは、あなたとともに生き、ともに愛し合い、戦ってきたのです。我々の血の最後の一滴まで、復しゅうに捧げることを、ひとり残されただけがないあなたの子どもに誓います」

これが、スペインのアナルコ・サンジカリズムから生まれた集団的反抗の魂であった。はじめフランスで生まれ、何年もの間フランスのアナキストたちにとつてはぐくまれてきた思想は、今やスペインのものとな

なった。そしてこの新しい土地で革命への希望は引きつがれていったのである。

一九〇八年、アムステルダムで展開されたサンジカリズムとアナキズムの、あの論争に終止符をうったスペインのアナキストたちは、CNTの名のもとに集団行動方式を採用したのである。その結果、アナキズムは歴史上、はじめて、一国の政治の第一線に登場してきたのだった。

イタリアのサンジカリズム

一三年間、ロンドンに住んでいたマラテスタは、一九一三年、イタリアにもどるとサンジカリズムにくらべて、ほとんど壊滅

左 イタリアの労働者のストライキベリザ・ホルベドの画。





右 『赤い週間』の精神がやがて労働者を革命へとかりたてた。

状態であった純粹アナキストの組織再建にとりかかった。彼は例のアムステルダム大会で行なった演説の精神を失わず、フランスのサンジカリズムの影響で誕生したUSIに対抗した。対抗したといっても、このUSIの運動を直接妨害するという意味ではなく、イタリアに革命の機運がもりあがっている今こそ、アナキストの団結が必要と考えてのことであった。この革命の機運というのは、社会的状況から、理論的に導かれたものではなく、むしろ、彼の直感的信念ともいべきものであった。だが後年一九一四年六月、アンコナでまさに革命が起こった。マラテスタの言葉を引用しよう。

「アンコナでの事件は各地に伝わって、あらゆる地方でストライキが勃発するようになった。改革主義的労働組合CGLと、革命的なUSIは協議し、ただちにゼネスト

を宣伝する鉄道労働者組合もすぐその後を追った。これらのストは新たな警察との衝突を生み、各地で流血事件を起こした。しかし地方間の連絡は政府によって中断されており、たがいにほかでは何が起こっているかもわからないまま、抗議運動は続けられ、反乱はだいに農民一揆の性格を帯びるようになった。多くの地方で人民は自治を宣言し、コンミュン形成したのであった。運動はもりあがり、鉄道ストライキは国内全線に拡大し、政府を麻痺状態に追いやった。しかし、突然、ゼネスト中止命令がCGLによって出された。そのため、労働者は迷い、運動は混乱し、政府はこの混乱を利用して、直ちに秩序を取りもどしてしまった。CGLの指令は、まったくの裏切り行為でしかなかった。後に『赤い週間』と呼ばれるこの反乱も、最後には政府がわ

の勝利に終わったのである。そしてイタリアのアナキスト運動は、夜明けをまちつつふたたび長い夜にはいつていくのであった。しかし、『赤い週間』の一时的な成功は、ゼネストがもたらしたものであり、イタリアでも、アナルコ・サンジカリズムの正しさは広く認められ、アナキスト運動のもっとも有力な手段として確立したのである。

アナキズムと社会主義

この時代、アナキズムの理論は、マルクス社会主義者から見れば、幻想の産物にしかすぎず、きわめて楽観的な展望しか持ち

合わせていないと非難されていた。したがって、アナキストたちは、政府からばかりでなく、社会主義諸政党からも敵視され、ますます孤立していくのであった。

サンジカリズム運動においても、アナキストが、その革命の主導権を握ったのは、スペインにおいてだけだった。アメリカ(IWW)でも、フランス(CGT)でも、マルクス主義が、アナキストを圧倒していた。しかし、両者の対立は、ほとんどの国ではその組織拡大のためにたがいに非難しあうといった程度のものであったが、ロシアの場合は、その程度ではすまされなかった。

一九世紀の終わりには、ロシアのマルクス主義者たちは、アナキストとの闘争準備を完了していた。ロシアの社会主義運動のバイオニアのひとりであったゲオルギイ・プレハノフは、その著書『アナキズムと社

会主義』で、アナキストを痛烈に批判した。その中で彼は、クロボトキンやジャン・グラープのような著者を、まるで言葉の遊びをしている子どももみただと書いている。同書の英語版では、編集者がそのことを、たくみに序文の中で表現している。

「G・プレハノフのごとき、大思想家が、アナキストのごとき口先だけの理論家を攻撃するのは、時間の浪費だと感じる者もあるかもしれない。しかし、残念なことに、若者や無知な人びとの中には、言葉を行動と同等とし、たんなる騒音や狂暴を革命的活動とつけとめる者が多い。彼らはそのような騒音や狂暴は何も意味しないことを知らないのである。」

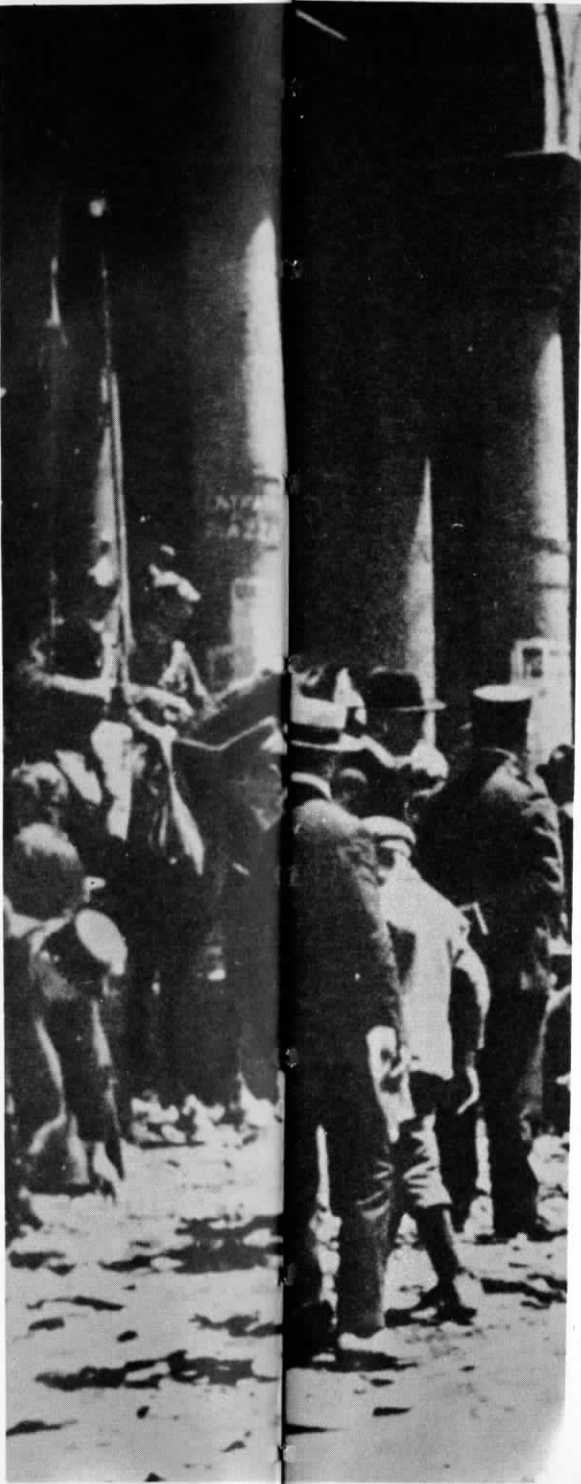
また、プレハノフ自身、本文の中で同じように軽蔑的に表現している。

「ある才人がこういった。アナキストの信

仰はふたつの空間的法則に要約できる。(一) 本来はすべて無である。(二)しかし、何人も自由であつて、そのことすら認める責任はない。しかし、それは正確ではない。アナキスト自身は、次の如くいつている。(一) 本来は万物が存在している。(二)しかし、その存在をみとめるかみとめないかは、本人の自由である。これはひとつの魅惑的な理想ではあるが、その実現は、お気のどくながら、まず可能性を持つてゐるものではない。」

「パンと自由」紙のアナキストたちも、まげずに反論、プレハノフとレーニンを、近代的魔術師、呪術師と呼び、マルクス主義のプロレタリアートの独裁は、専制君主的であり、ブルジョアが支配するのと同様の無を作り出すのだ、と批判した。

左 ミラノでも労働者は続々デモに集まつてきた。



一九〇五年の革命のとき、アナキストがかつてに無差別テロを行なつたため、アナキストとマルクス主義者の反目は、さらに激しくなつていった。しかし、レーニンの一〇月革命の成功でマルクス主義者の主張していたこと、すなわち、マルクス主義が科学的で、アナキズムは夢想的だという主張は正しいものとされたのであった。まさに、この革命の成功は、マルクス主義の実践的な行動力がもたらしたものであるからである。

アナキストも最初から、ケレンスキーの臨時政府に反対し、それを分裂させた力のひとつではあつたが、後に一〇月革命で、レーニンが勝利し、過激なボルシェビキが政権を獲得したとき、彼らは反対派にまわつた。彼らは、無政府主義者であるから、いかなる政府にも反対するのである。彼ら

はこれを、社会民主勢力と大衆の創造的精神の対立から起きる第三の革命と呼んでいた。そして、アナキストは、一九一七年の冬にブラック・ガードと呼ばれる、いくつかの集団を組織したのである。こうして無差別テロがふたたび復活することに、穏健派のアナキスト指導者は反対していたが、たとえ口先で反対していたとしても、危険であることに変わりないとして、ボルシェビキはブラック・ガードを鎮圧することに決定した。

モスクワにある二六カ所のアナキストの支部に対して秘密警察の手入れが行なわれた。無抵抗のところもあつたが、激しい抵抗もあり、四〇人のアナキストが殺され、五〇〇人が逮捕された。一方、ボルシェビキがわも、一二名の警官を失つた。ペテログラードのアナキストは、ボルシェビキの

この行動を非難した。
「おまえたちは兄弟を殺したカインだ！
おまえたちは同志を殺した！ おまえたちはユダだ！ 裏切り者だ！ レーニンは彼の一〇月の王座を我々の骨の上に建てたのだ！」

農民アナキストの首領・マクノ

しかし、すべてのアナキストが、この闘争に関係してゐたわけではなかつた。モスクワのアナキスト逮捕から二カ月後、有名な農民アナキスト、ネストール・マクノがモスクワでレーニンと会見した。マクノはボルシェビキの指導者、レーニンに深い感銘を受けたが、レーニンの言葉の中にあつた、アナキストは空想者である、という個

所は強く否定した。

会見後、彼は農民軍を組織するためにウクライナの生まれ故郷にもどった。当時、そこはロシアとドイツの間に結ばれたブレスト・リトウスク条約によってオーストリアの軍隊に占領されていた。マクノが村へ帰ったとき、彼の家は焼かれ、弟は殺されていた。怒りにもえた彼は、すぐ復しゅうのためにゲリラ部隊を組織し、電撃的にオーストリア占領軍の中心部をたたきのめした。攻撃後、彼はすぐに農夫にもどり、銃を農具に持ち変えたが、非常に有能な指導者として尊敬されるようになった。

アナキストの黒い旗の下で戦う、マクノのすぐれた特性は、すばらしい組織力と統率力に満ちあふれていた。そして彼のオーストリア軍に対する伝説的な勝利の数々は、赤軍とならび称せられるほどであった。

しかし、アナキストと共産主義者の協力には、そう長くは続かなかつた。やがて、マクノが自分の軍隊は共産党のものではないと主張しはじめると、ボルシェビキ系の新聞は、彼を「アナキズムの盗賊」と呼ぶようになった。このようにまさつの多い両者ではあったが、反革命軍との戦い（一九一九年）のために、彼らはふたたび手をつなぐのである。「自由か死か」というスローガンのもとにマクノは白軍を奇襲し、デニキン將軍のひきいる白軍を追放した。

しかし白軍という壁がとりのぞかれると再度、アナキストと共産主義者との戦いはじまった。それに一九一九年の冬、トロツキーは赤軍を使って、マクノのグループをウクライナ地方から追いはらおうとした。しかし、そのとき、再度、白軍が侵入してきたのである。例によって、ボルシェビキ

とアナキストは手を握りあつた。ボルシェビキ政権にとつては、どうしてもマクノの軍隊が必要であり、彼らは政治犯としてとらえているアナキストを釈放することまで約束したが、白軍との戦いが終わると、もうそんな約束は忘れてしまふのであつた。

翌一九二〇年一月、共産党はマクノの本部を徹底的に攻撃し、多くのアナキスト指導者をその場で射殺した。マクノ自身はかろうじて逃亡に成功し、一九二一年に、パリに亡命したが、これでロシアからアナキストは一掃されてしまったのである。

ところが皮肉なことに、マクノは西ヨーロッパの人びとの間では、当時、残忍なボルシェビキ政権の指導者だと思われていた。そして彼は、一九三五年、故郷から遠くはなれたパリで、ひとり寂しく死んでいった。

左一〇月革命の時のボルシェビキ軍隊。



ボルシェビキ革命への幻滅

ボルシェビキ政権との戦いの終わりは、ロシアのアナキズムの終わりであり、新しいロシアでは、アナキズムは反革命行為のひとつとみなされるようになった。ピクトル・サージが指摘するように、がんこで盲目的な理想のためにアナキズムは敗れ去ったのである。サージは、第一次大戦前はフランスの戦闘的なアナキストであったが、後に、現実の社会で、もっとも可能性を秘めているのは、むしろレーニン主義だと考え、ほかの多くのアナキストにも、その転向をすすめた。一九二一年、彼は次のように語った。

「組織、中央集権化、そして赤軍、この三つがなければ、ロシア革命は失敗していたであろう。これを無視すれば、ふたたびアナキストが行なっていた、過去の失敗のむかしになるだけであり、現実と歴史とチャンスに背をむけたむくいを受けることになるだろう」

しかし、ボルシェビキに無残にも裏切られたアナキストたちは、そうは考えなかった。革命の知らせに、期待をこめて、一九一九年母国ロシアに帰って来たエマ・ゴールドマンも、一九一七年イギリスから帰ってきたクロボトキンも、みんながっかりしてしまった。クロボトキンは、一九二一年二月に、その穏やかな生涯を閉じたが、その葬儀に参列した二万人のアナキストたちも同じように革命に対して、大きな幻滅を感じていた。そして同年二月、エマ・ゴールドマンは、失望のうちにロシアを去っていた。

「私は希望に胸ふくらませ、その約束の地、ロシアに帰って一年と一ヶ月がすぎた。しかし、いま私の心は決して満たされたものではない。ロシアの、この悲劇を前にして、私は敵・味方をとわず、聞いてもらいたい。革命の名のもとに行なわれた数々の犯罪に対して、声を大にして抗議したい」と彼女は書き残していた。

たしかに赤軍の数々の残忍な行為のまえでは、アナキストのテロなど、まるで色あせたものであり、アナキストの歴史上、は

左 アナキスト盗賊のリーダー マクノとその仲間（ロシア）



じめて西ヨーロッパで彼らは同情を買ったのだった。というのは、アナキズムは資本主義国の目からみれば、ボルシェビキ政権

にくらべて、恐れるにたらないものであり、同じ革命という言葉を口にしたとしても、いわば「二流の革命」であることを意味し

ていた。国家と資本主義に対して、数多くの反抗を続けたアナキストにとって、これは皮肉な墓標となったのである。